

## 善なる意志をもつことと、幸福な世界を抱くことの関係について

中島 未櫻乃 (Nakajima Miono)

法政大学

ルートヴィッヒ・ウィトゲンシュタインの前期著作『論理哲学論考』(以下『論考』)には、「幸福な世界は、不幸な世界とは別の世界である(『論考』6.43)」という不可解な記述がある。この文章を古田(2021)に従い整理するならば、私たちが仮に善なる意志を持つならば幸福の世界を、悪なる意志を持つならば不幸な世界を抱くことになる、ということの意味していると理解できる。私たちが善悪を基準に何かを意志する時、その意志は「倫理的なものの担い手としての意志(以下「意志 E」)(『論考』6.423)」と呼ばれる。この意志 E は私たちの現実世界にある事実を変容させることが出来ず、ただ世界の限界のみ変えることができる。そして世界の限界を変えるということは、世界そのものを別物にしてしまうということである。すると冒頭に戻って、あの不可解な記述が示すことは、善なる意志を持つ人は幸福な世界を抱き、悪なる意志を持つ人は不幸な世界を抱き、それぞれの世界は別物であるということだと理解できる。

しかしここで疑問が二つ浮かぶ。善なる意志を持つことと幸福な世界にいることを一致させて良いのかということ(悪なる意志と不幸な世界の一致についても然り)、もう一つは世界の限界を変えるということが世界そのものを別物にするとはどういうことか、である。

確かに主流の哲学者たちが、例えばカントは定言命法に従い尽くして徳福一致の状態(最高善)にいることこそ幸福であると述べるなど、善なる意志を持って行動することを幸福な状態になることとを一致させてきており、ウィトゲンシュタインもまたそのように善であることと幸福であることとを一致したのかもしれない。けれども『論考』において善なる意志を持つことを推奨されてはいないし、加えて善なる意志を持つことと幸福になることとの関連について特別明記されてはいない。また仮に善なる意志を持ったとしても、実行にうつきなくては幸福にはなれないように思われるが、あとで確認するように意志 E に行為を実行する働きは備わっていない。さらには『草稿 1914-1916』(以下『草稿』)に「幸福に生きよ!、ということより以上は語りえないと思われる(『草稿』1916.7.29)」という記述があり、ウィトゲンシュタインは私たちに基準となる道德法則を与えるのではなく、幸福であるように生きるのだと、私たちが幸福である態度でいることのみを勧めている。だが一体どうして、善なる意志 E を抱くことだけで幸福な状態になれるというのか。

また幸福な世界と不幸な世界が別物であるということの理解には、意志 E が世界の限界を変えるということが意味するところを明らかにする必要がある。『論考』には世界の限界を変えると、世界そのものが変わってしまうという記述が残されているが、何故このように論理は展開出来るのだろうか。実際『論考』の六章以前

で「限界」という言葉が用いられる際には、言語の働きの限界によって、世界のうちで説明できないものを示してきた。限界は序文でも、限界の範囲内と範囲外の両側から思考することが出来ないため、線を引くように限界を記しづけることが出来ない、と説明されている。このように限界そのものに何か働きかけが出来るものは何一つなかったように思われる。では一体なぜここで意志 E が「世界の限界を変える」という限界への働きかけが可能であると記しているのだろうか。

今回は『論考』と『草稿』の記述を参考に、上記二つの疑問を明らかにしていく。その際主に古田（2021）を参考に検討する。

#### 参考文献

Genia Schönbaumsfeld, “‘Meaning-dawning’ in Wittgenstein’s Notebooks: a Kierkegaardian reading and critique”, *British Journal for the History of Philosophy*, volume26, 2018

古田徹也、「前期ウィットゲンシュタインにおける『意志』とは何か」、(『現代思想 2022年1月臨時増刊号 総特集=ウィットゲンシュタイン』)、青土社、2021年

P・ウィンチ、「VI ウィットゲンシュタインの意志論」、(『倫理と行為』奥雅博、松本洋之訳)、勁草書房、1987年

『論考』—Wittgenstein, L. (1922) ”*Tractatus Logico-Philosophicus*”, Oxford World’s Classics, Micheal Beaney (2023) [「論理哲学論考」, 『ウィットゲンシュタイン全集1』奥雅博訳、大修館書店、1975年]

『草稿』—L・ウィットゲンシュタイン、「草稿 1914-1916」、『ウィットゲンシュタイン全集1』、奥雅博訳、大修館書店、1975年